

菊地秀行

魔戦記
第3部ハルパロイ転生



KADOKAWA NOVELS

古代超人の運命あやつに操られるまま、
角鹿たちは壮絶なる魔戦の渦中へ——
炸裂するスパーク超時空伝奇アクション



カドカワパルズ

昭和六十一年十一月二十五日初版発行

著者 菊地秀行きくちひでゆき

発行者 角川春樹

魔戦記ませんき 第3部 バルバロイ転生てんせい

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社多摩文庫

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見一三三 振替東京三一九三〇八

〒〇三 電話 営業〇三三八八五三 編集〇三三八八四一

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-778803-1 C0293

菊地秀行

魔戦記
第3部ハルハロイ転生



KADOKAWA NOVELS

古代超人の運命に操られるまあやつま、
角鹿たちは壮絶なる魔戦の渦中へつねがへ——。
炸裂する超時空伝奇アクションスパーク

角川

KADOKAWA NOVELS

●作者のことば

『魔戦記』第3部は、再び淡路島に戻り、その海底に眠る秘密を巡^{めぐ}って、新たな魔戦が繰り広げられるでしょう。この物語の間に、

四人の宿命と目的、敵の正体は一層明らかになってきます。

角鹿^{つぬが}の行くところ、日本は魔界と化し、その歩みは作者の意図を越えて、どのような展開を見せるか、想像もつきません。

いま、筆をとっているのは、果たして私でしょうか？

略歴 一九四九年千葉生。青山学院大卒。『魔界都市(新宿)』でデビュー。著書に『魔界行』『妖魔戦線』他。

3-1 C0293 ¥640E

価640円

需要全本请在线购买:



ガガバルズ

昭和六十一年十一月二十五日初版発行

著者 菊地秀行きくち ひでゆき

発行者 角川春樹

魔戦記ませんき 第3部 バルパロイ転生てんせい

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社多摩文庫

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見一三三 振替東京三一九三〇八

〒100 電話 営業〇三三八八五三 編集〇三三八八四一

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-778803-1 C0293

KADOKAWA NOVELS

魔戦記

第3部 バルバロイ転生

菊地秀行

目次

第一章 魔海戦まかいせん

9

第二章 女体の罫むなのわ

39

第三章 長い日

66

第四章 淫猥な夜明けいんわいなよあけ

93

第五章 好敵手

135

第一章 魔海戦

1

潮の香りが鼻の中に溜まっていた。

妙に懐かしい香りだった。

そんな感慨を私に抱かせたのは、眼前に横たわる紺碧のうねりのせいかもしれない。

海だ。

大阪港の彼方に広がる青い海原であった。

私が現在の境遇へ本格的な第一歩を踏み出したの

は、明石港から望む、鉛色の海からであった。

一艘のフェリーが私を淡路島へ導き、否応なしに、

あり得ぬ魔戦へ巻き込んだのである。

すべては海からはじまり、

そして、また、海であった。

「風が出て来ましたが、内部にいた方がよくはありませんか？」

背後で、力強い声が私を氣遣った。

発着所の待合室にいろという提案だ。

「君ほどタフではないが、これくらい海風なら風邪をひくこともあるまい」

私は低い声で言った。我ながら、覇気に乏しい声である。腹から出さず、喉がひねり出したものだ。

「そうおっしゃらずに。武田さんも心配しております」

「なあ、角鹿くん——」

と私はふり返らずに話しかけた。

「は」

「また、海だ」

「は」

「明石から淡路島へ渡ったときも海だった」

「は」

「そして、また戻ろうとする」

「は」

私はふり向いた。単調な返事に腹が立ったのである。

角鹿荒人は、それにふさわしい、春風駘蕩という顔つきで私を見つめていた。

それを見た途端、怒りは潮のように引いていった。得な男だ。

「君——結婚はせんのかね？」

と訊いてみた。

我ながら馬鹿な質問だったが、角鹿はいと言つて、

「したいのですが、経済的にまだ——」

「男が給料の不満を上司に洩らすものではなから

う」

「ごもつともです」

角鹿は取入ったようにうなずいた。

「うちのサラリーは、それほど安いかね？」

「いいえ。他社に比べて、それほど……。高くもありませんが」

「なら、我慢したまえ。君もこんな旅をやめて、真面目に勤めれば、それなりの地位には行くと思

うが」

「はあ」

「我が社の状況はどうなのだ？ 新聞を見る限りでは平穩無事らしいが、向うの私はきちんと職務を果たしているのかね？」

「さて」

と角鹿は首をかしげた。この狸めが。素つとぼけていて得体が知れん。確かに、大物の素質は備えているようだ。

「ところで、この旅には休暇というものが無いのかね？ 家族の声ぐらいききたいと思うが」

「さあ、私には何とも。何でしたら、電話か手紙でも」

「ま、やめておこう」

私はちよつと考えて言った。

「東京へかけて、向うの私と鉢合わせしたら事だ」
本当は氣狂い扱いされるのが嫌なんだが、それを口に出すほど、落ちぶれてはおらん。

角鹿は一礼した。

「私、あの二人の様子を見て参りますが、社長も？」

「いや、もう少し、ここにしよう」

と私は、通りの方から港灣の敷地内へ入ってくる
パンの群れを見ながら答えた。

角鹿は立ち去った。

私はもう一度、青い空の果てへ眼を向けた。

また、淡路島へ戻らねばならない。

それに文句を言つても詮ないことである。角鹿自身どうにもなるものではない。いや、彼がその気になれば、NONと答えられるかもしれないが、私のためにそれを曲げる気はあるまい。

そう思うと無性に腹が立ってきた。

痩せても枯れても、大住川重工の総帥が、何の因果で、ちつぽけな支社の平社員風情の旅に付き合わねばならんのだ!?

左右のこめかみに蠢く熱い虫を揉んでおさめ、私は別のことを考えた。

本社の仕事。

私以外の私が腰を据えて、あれこれ指図を発している。

いかん。こめかみが裂けそうだ。

成城の我が家。

妻の明美。

四五歳の女盛りの肢体が、組み敷かれてゐる光景が浮かんだ。

脂肪ぎった、醜い酒袋のような身体が、白い脚の間に腰をつけ、激しく突き上げてゐる光景。場所は寢室だ。私と明美の――

私でさえ時に辟易する妻の嬌声とうめきが耳を突いた。自分から必死に腰をくねらせ、より奥深い充足を求めていく。

そいつが、こちらを向いた。

わかっている。

私の顔だ。

もうひとりの私が、妻との夜の生活を欠かすはずがない。

絶望が私の胸を捉えた。

やはり、大人しく角鹿の旅に同行する他はなさそうだ。

だが、その真の意味と名を誰が知ろう。

これは、アレキサンダーの東征であると。と言つてもわかるまい。

私ですら、今も半信半疑なのだ。

紀元前三五六年、ギリシアの小国マケドニアに生まれたアレキサンダーが当時の大帝國ベルシアを一蹴して小アジアを平定、メソポタミアからエジプト、さらにペルシア本土を蹂躪した後、中央アジア、インドへと向かい、ビュファシス河でついに反転するまで、大東征は、紀元前三三四年から三二六年に到る丸八年。直線距離にして四八〇〇キロに及んだ。この道程を、角鹿荒人は忠実に辿り直そうとしてゐるのだ。

それも、この日本を舞台にして。

誰が聞いても気狂いのたわ言だ。

ひょっとしたら、角鹿自身もそう思つてゐたのかもしれない。

九州の一僻地の山中で、あの啓示を受けるまでは。

福岡県豊前市の山峽——求菩提。その求菩提山の
山中で、私と秘書の武田沙織は、角鹿とともに、奇
怪な一致図を見た。

すなわち、日本地図が世界地図に重なり、世界地
図が日本地図と化して、アレキサンダーの道程を、
そのまま、日本に再現する光景を。

私もあれから学んだ。

世に言う五大州対応図——日本本州と九州、四国、
北海道、台湾が、それぞれ、世界の雛型に当たると
いう奇妙な説がある。

本州がユーラシア大陸に。

北海道が北アメリカに。

台湾が南アメリカに。

四国がオーストラリアに。

そして、九州がアフリカに。

さらに。

対馬はスピッツベルゲン島。

佐渡島はノバゼムリヤ島。

壱岐はアイスランド。

隠岐はイギリスと重なり、瀬戸内海は地中海に、
大阪湾は黒海に該当し、紀伊半島はアラビア半島に
あたる。

アレキサンダーの求めて果たせなかつた目的地イ
ンドは御前崎であり、インダス河は天竜川、母なる
ガンジスは富士川となる。

これは私と武田沙織が話し合つたことだが、海外
旅行へ出掛けた折り、私たちがばかりでなく、旅行者
の大半が、はじめての外国にもかかわらず、かつて
一度、かの地を訪れたような、一種の懐しさを覚える
ことがあるそうだ。

これは、日本を訪れる外国人たちにもあてはまる
現象で、心理学にいう既視症——デジャヴユという。

ひよっとすると——

そう、ひよっとしたら——

我々は、知らず知らずのうちに、世界を廻っているのかもしれないのだ。

東京から京都に到れば、そこはもう中央アジアの大平原であり、満々と水をたたえる日本最大の湖・琵琶湖畔に一泊すれば、ホテルの窓から望む夕陽は、そのまま世界最大の湖・カスピ海に沈む陽だ。

一気に能登半島へとび、能登金剛の断崖に立つてみれば、容易に陽はおちず、霧ばかりが深いのではないか。スカンジナビア半島はいつもそんなのだ。

帰りは名古屋から伊勢の方へ廻ってみようか。

日本人の故郷・伊勢神宮が、実は古代文明発祥の地——メソポタミアとほぼ重なり合うことを知ったとき、さしもの私も眼を剝いてしまった。パール・ロードなる高速自動車道が開通し、観光にひと役買っている志摩半島の小湾——牡蠣の養殖で名高い的矢湾や、真珠が名物の英虞湾はすべてならされ、伊勢湾に収束されて、アラビア湾（ペルシア湾）となる。

アラビア湾でバーレーン政府が大々的に真珠の養殖を計画しているという情報が私の手元に入ったのは、いつのことだったろうか。

これを現実の出来事と見なす限り、角鹿Ⅱアレキサンダーの東征も故なきことではない。

だが、何のために？

エジプトⅡ福岡、この求菩提山中の地下はシヴァのオアシスにあたった。

かつて、アレキサンダーが数名の部下とともに、鳥や小動物に導かれて達したというそのオアシスで、角鹿は、自らがアレキサンダーに他ならぬという啓示を受けたのである。

私も聞いた。

同時に、その目的も。

彼はアトランチスの知性を求めていたと。

いや、いる、と。

彼はそのために、再びかつての大東征を再現しは

じめた。

そうしない限り、同じ轍を踏まない限り、アトランチスの知性は手に入らぬのであろう。

だが、何のために現在、それを求めるのか？

これだけは角鹿しかわからない。

私の想像だが、彼も知らぬのではないか。

アトランチスの知性とは何か？

私に言わせれば、たわ言だ。

遠い過去に、海底に没したという伝説の大陸。

あるかなきかも未だ結論の出ない夢物語を原点到置く旅など、いずれ瓦解するのは眼に見えている。

そうは思うのだが、いざ、事が起きると、そんな

確信もぐらついてしまう。

つい一週間前、私は人気のない山中に、一夜にして巨大な「都市」が出現するのを見た。

アレキサンドリアであった。

その建設目的も定かにならぬうちに、角鹿はそこ

を離れた。

一種のシールドによって、静止衛星にも都市の存在は暴かれず、近くを通りかかった旅行者や農家の連中も、そこに見るのは、かつてと同じ、荒々しい未開の森と崖だという。

だが、それを眼のあたりにしながら、私はまだ納得しきれない。

すべてが悪夢のような、壮大なベテンという気がする。

私の居場所は東京、大手町の一角にあり、冷酷な経済論理の支配する苛烈な日常が強烈に私を引きつけるのだ。

私の世界は現実のさなかにある。断じて、このような狂った非現実ではない。

なんとか戻れぬものか、と海の彼方に遠い切実な視線を向けたとき、背後で幾つもの足音が重なった。